

CVV大和川沿い橋梁調査（誉田八幡宮編）

[誉田八幡宮]

この神社は、世界遺産古市古墳群の内、最大の応神天皇陵の守護神として6世紀後半に創建された日本最古の八幡宮である。以後、この陵の主祭神として各種祭祀を取り仕切る役割を果たしている。



○ 1 3重層塔遺構



写真-4は本来、13重と推定される層塔の一部である。柔らかく、加工容易な凝灰岩を使用し、13重の塔として13世紀初頭に製作。風化により崩壊が激しく、現状は軸部とその上にのる4層分の屋根型の笠部が残っている。

○ 放生（ほうじょう）橋^{*}

＊）羽曳野市指定有形文化財（2015年12月）

八幡宮本殿から応神天皇陵に向う参道を横切る放生川に架かる参道橋。応神天皇を主祭神とする菅田八幡宮と応神天皇陵との関係象徴する重要遺構である。橋の諸元は橋長 5.8m、幅員 2.5m、円弧状の3主桁上に花崗岩製床板ブロック（幅 30cm×厚 12cm）を敷詰めた構造である。橋梁全体は一見、アーチ橋に見えるが、支間中央に橋脚を設置、花崗岩製円弧状主桁を橋脚上で分離しており、2径間の単純支持3主桁橋と言える。ただし、橋脚上の主桁は相互に密接圧着した状況であり、圧縮軸力は伝達可能な様子である。この場合、橋脚位置をアーチクラウンとみた一径間の擬似スリーヒンジアーチ橋とも言える。なお、架橋時期は江戸時代前半と推定されている。この時代に同タイプの木構造アーチ橋が各所に架橋されており、その形を模したという説が有力である。



写真-5 放生橋概要

【所 感】

秋季大祭では応神天皇の神霊を載せた神輿を、過去には本殿からこの橋を渡って応神天皇陵へ渡御する神事が厳粛に行われたそうである。現在は隣の直橋を使用するそうですが、江戸時代まで、そのような難行を強いることになった趣旨は庶民の天皇陵への接近は困難を伴うということの象徴か？